



連載

常陸時代の佐竹氏

— 500 年の軌跡を追う —

「五本骨扇に月丸」
の佐竹氏家紋

【第21回】

佐竹氏、54万5800石の大々名

1 水戸城跡に建つ薬医門
(橋詰門)

茨城県の県庁所在地・水戸市。JR常磐線水戸駅の北口で下車し、駅を背に右側のペデストリアンデッキを渡り、银杏坂方面に降りる。緩やかな坂道を北に向かって歩く。右手に水戸中央郵便局がみえる。同局を右折すると、右前方に巨大な堀跡が現れる。水戸城跡の空堀である。堀跡沿いに歩くと現在、茨城県三の丸庁舎となっている旧茨城県庁入り口がある。

同三の丸庁舎敷地内を経て同庁舎南側の弘道館公園を抜けると、水戸藩の藩校だった弘道館の前へ出る。同館正面の大手橋を渡ると、目の前に令和2年(2020)2月、復元整備が完了した水戸城大手門がそびえる。威風堂々の建物。大手門をくぐると、茨城大学附属幼稚園・同附属小学校、水戸市立第二中学校、茨城県立水戸第三高等学校が並ぶエリアに入る。この一帯が水戸城二の丸跡。

さらに進んで本城橋を渡ると、本丸跡。茨城県立水戸第一高等学校・同附属中学校が建つ。同校敷地内に土塁と薬医門がある。説明板は「最古の水戸城の建造物」とし、「土塁と堀切は壮大で、国内最大級の土づくりの城」と書く。薬医門は「本城橋を渡った場所に本丸表門として建てられ、当時は橋詰門と呼ばれていた」という。推定建築年代は「安土桃山時代末期」とのこと。

2 伏見城の堀普請と
京都伏見屋敷

佐竹氏20代当主義宣は、文禄2年(1593)秋、九州・名護屋城(佐賀県唐津市)から居城の水戸城に帰陣した。義宣は天正19年(1591)、それまでの居城・太田城(常陸太田市)を父義重に任せ、自らは「常陸のいわば中原にのぞむ水戸城」(『水戸市史 上巻』)に移っていた。「広大な領国を統治するためには、太田城はあまり

に北に偏在している」(『同』)ことが大きな理由だった。

義宣は懸案だった水戸城の普請に着手した。家臣の屋敷建設も行われ、久しぶりに穏やかな文禄3年(1594)の新春だった。ところが義宣に豊臣秀吉から京都・伏見城(京都市伏見区)の堀普請の命令が下った。『佐竹家譜』は文禄3年1月19日の条に「於伏見総構堀普請、従来月十日可被仰付之条、令用意人数三千人召連可罷上候」と記す。来月(2月)10日までに3千人を連れて伏見城の堀普請に当たれという命令である。

また、『佐竹家譜』は文禄3年の後段(条の月日なし)で「秀吉公義宣に宅地を山州伏見に賜ふ。第宅已に成(以下略)」と書く。義宣は「山州」(京都府南部)伏見に自らの邸宅を構えることになった。(財)京都市埋蔵文化財研究所は平成19年(2007)、京都市伏見区桃山福島太夫西町で京都銀行社員寮新設に伴う発掘調査を実施した。何とこの場所から佐竹紋入りの軒丸瓦が多数出土したのである。

3 石田三成による「太閤検地」

文禄3年はもう一つ、大きな動きがあった。秀吉は同年10月から石田三成を検地奉行に佐竹領の検地に入った。対象となった「佐竹領」は「文禄三年佐竹領検地覚書」(『常陸大宮市史資料編2 古代・中世』収録)によると、「久慈郡、多珂郡、鹿嶋郡、行方郡、新治郡、真壁郡、志多郡、河内郡、筑波郡、茨城郡、那賀郡、奥州之内南郷、下野之内武茂、同松野、同茂木」とある。

常陸国は11郡。奥州(福島県エリア)の南郷について『塙町史』が秋田藩家蔵文書を基に「奥州内佐竹知行、滑津・赤館・南郷中」と書いている。滑津(同県西白河郡中島村)から棚倉・塙・矢祭町などを指していると考えられる。下野国(栃木県)は那珂川に近い3地区。検地期間は「同覚書」に「此度御検地文禄三年十月よ

り之御検地にて極月晦日迄打候也」とあるので、10月から12月末日までと考えられる。

3ヶ国にまたがる広範囲の佐竹領をわずか3ヶ月で実施したとすれば、かなりの検地役人を投入しないとできないであろう。義宣家臣も動員されたのではないか。太閤検地は従来の「貫高制」から土地の生産量を「石高制」で示すことになった画期的な検地である。石高制は「明治6年（1873）、明治政府による土地制度の改革に伴い廃止されるまで、長い間土地表示の基準となった」（『水戸市史 上巻』）。

4 54万5800石の大々名

佐竹領に対する検地を踏まえ秀吉は文禄4年（1595）6月、義宣に知行地を宛がう朱印状を發した。「佐竹知行割之事」と書かれた『豊臣秀吉朱印状写』（『常陸大宮市史 資料編古代・中世』収録）によると、石高別に氏名を記述しうえて最後に「都合五十四万五千八百石 右、今度以検地之上、被成御支配候也（年月日略）羽柴常陸侍従とのへ」とある。「羽柴常陸侍従」とは佐竹義宣のことである。

石高の内訳は以下の通りである。「拾五万石義宣 拾万石義宣蔵入 五万石義重 六万石佐竹中務太輔 拾六万八千八百石与力家来 壹万石太閤様御蔵入 千石佐竹中務御代官徳分 参千石石田治部少輔 三千石増田右衛門尉」。「義重」は義宣の父。「佐竹中務太輔」は佐竹一門の東義久、「石田治部少輔」は石田三成、「増田右衛門尉」は増田長盛を指す。「蔵入」は直轄地のこと。東義久の「徳分」は秀吉の直轄地の代官代。

義宣は豊臣政権下で大々名のお墨付きを得たことになる。その順位を『常陸・秋田佐竹一族』（七宮淳三著、2001年新人物往来社発行）は次のように記す。「徳川家康（255万石）、毛利輝元（120万石）、上杉景勝（120万石）、前田利家（83万石）、島津義久（70万石）、伊達政宗（58万石）、宇喜多秀家（57万石）に次ぐ全国8位の大々名となった」と。

5 近世水戸城下の基礎を築く

大々名となった義宣は、「常陸の中原」に位置する水戸城を領国支配の拠点とするため城の整備を間断なく進めた。江戸氏時代の「古実城」を本丸とし、もと「宿城」と呼ばれた一角を二

の丸として城郭化した。さらにその外側を三の丸としたようだ。「町人町の大町はこの廓（三の丸＝筆者注）の門前に定められ、城郭は町人町からははっきりと分離された」（『水戸市史 上巻』）。

こうして城下町・水戸が形成された。義宣時代の城下町は、江戸時代の水戸徳川家による街づくりの基礎となった。城下の整備に併せ義宣は太閤検地による知行割を基に旗本家臣団を城下や近隣に貼り付け、一門や外様の有力諸將を領内各地の拠点に配置した。大掾氏の居城だった府中城（石岡市）には一門の佐竹（南）義種、小田氏一族の柿岡氏が支配していた柿岡城に一族の長倉義興を置くなど各地で思い切った配置替えを断行した。

義宣は、太田城を父義重に任せ、自らは「常陸の中原」水戸城から常陸国内はもとより奥州の南郷、下野国の武茂・松野・茂木を支配した。それは関東で徳川家康に次ぐ威勢と映ったことだろう。京都に伏見屋敷を持ち、秀吉側近の三成とも昵懇の間柄にあった。義宣時代の水戸城下は京都から当代一流の桃山文化が流入し、「宮（宇都宮）商人」が出入りし、「市」も開かれて大いににぎわっていたことであろう。

歴史ジャーナリスト
茨城県郷土文化研究会会長
富山 章一



佐竹氏支配時代の面影を残す旧水戸城薬医門。安土桃山時代末期の建築とされる＝水戸市三の丸3丁目。